

大学生の生活に影響を及ぼす他者の意味*
——「意味ある他者」研究への新しい手がかりを求めて——

安達喜美子**・菊池龍三郎***・木村 清一****

（1986年9月27日受理）

The Meaning of Others Influencing on the Life of College Students:
Toward a New Clue to the Study of "Significant Others"*

Kimiko ADACHI**, Ryuzaburo KIKUCHI*** and Seiichi KIMURA****

（Received September 27, 1986）

1. 問題の背景と研究目的

(1) 「大人になること」

われわれは既に前稿¹⁾と前々稿²⁾において現代青年における「成人感」の発生が極く限られた条件のもとでしか生起しないこと、それと関わって「子ども期」「青年期」「大人」という3つの時期の間にかつて存在した間隙が見当らなくなり、「青年期」が「子ども期」と「大人」の両方に重なり合うようになってきていること等を調査によって明らかにした。

青年にとって「大人」になることは極端な場合「20歳になること」や「選挙権を持つこと」といった形式的な意味を持つに過ぎない。彼らの多くは「大人」になることを自己の内部の「子供」的なものへの羞恥の感情、あるいは「大人」になること自体への拘泥を否定的に媒介することによって達成されるものとは考えてはいない。

本来青年期とは自己の内なる子供性、幼児性を羞恥の感覚をもって思い知る体験に彩られた時期であった。幼児性、子供性に対する羞恥の感覚とは、ある意味で「空白」や「欠如」の感覚でもある。空白や欠如の感覚が強いほどそれを埋めようとする成長衝動は青年の中で強くなる。そして、それは身近な大人への同一化要求という形で表われる。

しかし前稿、前々稿において繰り返し指摘したように、今日われわれが目当たりとする青年達にはこうした空白や欠如の感覚は殆んど見当らないと言ってもよい。ましてやそこに羞恥の感覚はない。多分、いわゆる社会の構造的変化と言われるものは、既にわれわれが思っている以上に社会

* 本稿は、（財）マツダ財団研究助成金による「地域における青少年教育のシステム化に関する基礎的研究」の調査結果の一部を使用したものである。

** 茨城大学教育学部教育心理学研究室

*** 茨城大学教育学部教育学研究室

**** 国立オリンピック記念青少年総合センター

的關係における青年の位置を変えてしまっており、今や彼ら青年を中心にした社会を作り出していると考えられる。

別稿³⁾でも述べたように、現代は青年が青年のままにいられる時代であり、重要なことはわれわれの社会がそのためのハードとソフトの両面での技術的要件を備えていることなのである。このことは現代青年を解説するための不可欠の視点であるが今回は取り上げず稿を改めて論究したい。

(2) 青年にとっての「他者」の意味

青年をして既存の社会や大人とは無関係な自己充足的、自足的存在たらしめていく傾向は、今後彼らを取り巻く社会や人間関係が増々メディアへの依存を増すにつれ一層顕著になると考えられる。しかしわれわれの関心はそこにあるのではない。

われわれは、青年の自己充足的な傾向は、青年と他者との関係を根本から変えてしまっているのではないか、その中で青年が他者から受ける「影響」のいわば量と意味が大きく変化してきているのではないかということに関心を持っている。

われわれの青年期においては、「大人」や「社会」は現代の青年以上に重い意味を持っていた。特に「大人」は、彼らが備えている知識や技術の体系、そして何よりも経験の蓄積は、青年にとって無視できない重みを持っていたと言ってもよいであろう。そして青年が必要とする知識や技術の情報が、主として大人 → 青年という回路で伝達されていたことに加えて、青年が接触するメディアが大勢として既成の大人文化の教育的価値を承認し、それを青年に伝達することを当然のこととして前提としていたことは、青年の成人観やあるいは成人との人間関係を規定していた。特に産業構造の転換期以前においては、青年の生業決定のモデルは多くの場合具体的には身近な父親になりやすい。従って親は反発、拒否、忌避の対象ではあっても、親に代表される大人文化とその大人から青年へという回路での伝達は青年によっても承認されるしかなかったと言ってよい。

その中で例えば「その人からの忠告が胸にこたえる」とか「生き方について教を請うためにその人の門を叩く」あるいは「自分の悩みをわかって欲しくてその人の胸に飛び込む」等々の、多分今日の青年にとっては死語に近くなった表現が、敢えて言うなら青年と大人との関係を暗示していた。つまり青年と大人との関係には、そのような教育的関係と言ってもあながち誤りではないところの意味合いが含まれていたと言ってよい。それは繰り返言えば、大人が知識や技術の情報を独占しているという条件を前提としている。

そうした知識や技術の情報の独占が崩れたこと、とりわけコンピュータに代表される操作的技術の普及とその支配力の強化は、青年と大人との関係を逆転させた。なぜなら新しい操作的技術への適応と習熟は青年においてより敏速であるからである。

となると青年が社会生活あるいは人生を送る上で必要な知識や態度も必要ないのだろうか。必要でないことはない。青年もまた大人が彼らの社会的な態度に関わる常識の欠如を非難する以前にそのことの必要性は、その程度はともかく認めている。問題なのはそうした知識や態度の獲得もまたメディアに依存することで達成される。格別大人に頼る必要は余りないのである。

「他者」の意味は、他者に何を期待し、他者をどんな意味で必要と感じるかという青年の意識によって規定される。本稿では現代青年が「他者」をどんな意味で捉えているかを明らかにする。

2. 研究計画

われわれは日常、様々な人々との対人関係の中で、彼らから種々の評価を受ける。それらのあるものは無視されたり、すぐ忘れられてしまったりするけれども、他のあるものはわれわれの心に強く響き、永く心に残る。あるいは、ある人からの評価は左程気にならないが、他のある人からの評価はひどく気になったりする。そのような時、われわれは知らず知らずの内に、その評価が気になる人の基準に合うよう行動を修正していったり、その考え方を自分の中に取り入れたりする。

そのようにして、ある特定の人（人達）が個人の中で意味を持ってくる。そのような人（人達）を significant others（意味ある他者、あるいは重要な他者）と呼んでいる。つまり、意味ある他者（significant others）とは個人（本研究においては青年）の生活の中で、その存在自体が、あるいはその言葉がある重要な意味を持ち個人の生活に影響を及ぼす他者のことである。

意味ある他者（significant others）についてはすでに自己概念との関連やパーソナリティとの関連、価値観との関連からのアプローチは試みられている（Woelfel, Joseph & A.O. Haller, 1971; 岩佐⁴⁾, 1976; Otto, Luther B., 1977; 木舟⁵⁾, 1979; Donald, Roetzes & Elizabeth Mutran⁶⁾, 1980)。これらの諸研究における意味ある他者は、Reitzes & Mutran⁶⁾ (1980) が提起している Model に示されるように（図1）「両親」や「友人」が考えられることが多い。これに「教師」が加わるのがせいぜいである。

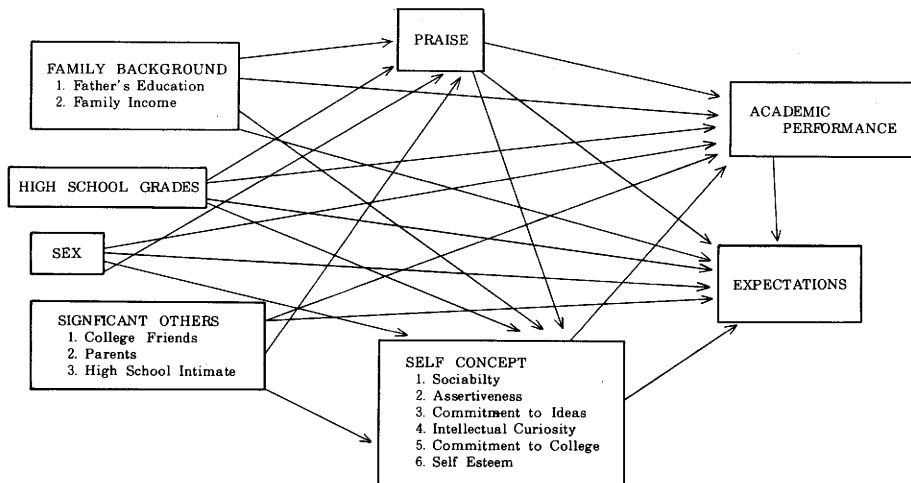


図1 Reitzes & Mutran によって提起された Model (1980)⁶⁾.

しかし、われわれは青年の生活に何らかの影響を及ぼすのは、従来のほとんどの研究が取り上げているような「両親」、「友人」、「教師」などといった人達だけではないのではないかと考えている。現代のように価値観が多様化していると言われながら、一方で「カッコよさ」だけがあらゆる場面での選択基準になっている状況があり、タテマエとホンネということが関心の的になり、タテマエだけの人間が敬遠される現代に生きる青年にとって、タテマエで擬装し、それを楯に迫ってくる「立派な大人」という側面だけを子供（青年）の前で演じてみせる「両親」や「教師」よりも、むしろ人生の裏面、暗さを垣間見せつゝ、それでホンネを見せているかのようなポーズをとって接し

表1 質問紙

本調査は日頃、皆さんがどのような人たちとお互いに影響し合っているかを知るためのものです。御協力をお願いします。

青年問題研究会 菊池龍三郎，木村清一，安達喜美子

性：男 女 所属：高校 大学

次にあげてある25項目について、そのような場合に、あなたが思い浮べる人を、右から選んで思い浮かぶ順に3名あげて下さい。（ ）の場合には具体的に記入して下さい。

1. 自分の生き方について参考になる話を聞いてみたい…………… (1.), (2.), (3.)
2. 悩みなどを相談したい…………… (1.), (2.), (3.)
3. 自分を認めてもらいたい…………… (1.), (2.), (3.)
4. あんなふうになりたい…………… (1.), (2.), (3.)
5. その人から注意、忠告されるとこたえる…………… (1.), (2.), (3.)
6. その人の前に出ると緊張してしまう…………… (1.), (2.), (3.)
7. その人と運命を共にしたい…………… (1.), (2.), (3.)
8. その人を知っていることが誇りだ…………… (1.), (2.), (3.)
9. 親しくしたい…………… (1.), (2.), (3.)
10. その人の言うことなら無条件に従える…………… (1.), (2.), (3.)
11. 甘えられる…………… (1.), (2.), (3.)
12. 自分の悩みなど分って欲しい…………… (1.), (2.), (3.)
13. 一目おいている…………… (1.), (2.), (3.)
14. その人からどう思われているか気になる…………… (1.), (2.), (3.)
15. あんなふうにはなりたくない…………… (1.), (2.), (3.)
16. 自分がないとその人が困るだろう…………… (1.), (2.), (3.)
17. 自分の弱味を知られたくない…………… (1.), (2.), (3.)
18. 自分の生き方を変えるきっかけになった…………… (1.), (2.), (3.)
19. 尊敬している…………… (1.), (2.), (3.)
20. その人のために何かしてあげたい…………… (1.), (2.), (3.)

21. その人をのり越えたい…………… (1.), (2.), (3.)
22. その人に対しては嘘がつかない…………… (1.), (2.), (3.)
23. 困ったとき、苦しい時、その人の助けを求めたい…………… (1.), (2.), (3.)
24. その人を知っていることで自分を大きく見せられる…………… (1.), (2.), (3.)
25. 何か困ったことがあるとき、「あの人がいたらどうするだろうか」と思う……………
(1.), (2.), (3.)

父, 母, 祖父母, 姉, 兄, 弟, 妹, 夫や妻,
 父や母のきょうだい(おじ, おば), 近所の人,
 小学校の時の教師, 中学校の時の教師, 高校の時の教師,
 専門学校・短大・大学の時の教師,
 家庭教師, 塾・予備校の教師, その他の教師(),
 小・中学校の時の友達, 高校の時の友達, 専門学校・短大・大学の時の友達,
 塾・予備校の時の友達, 恋人,
 同じ趣味・遊びの仲間, 団体活動(例えばボーイスカウト, 青年団など)のリーダー,
 仕事上の同僚, 仕事上の先輩, 仕事上の上司, アルバイト先の先輩, 組織の先輩,
 歌手, 俳優, 落語家, スポーツ選手,
 TVやラジオのパーソナリティ(司会者, タレントを含む),
 知り合いの警察官, 知り合いの医者や看護婦, 青少年指導のおじさん・おばさん,
 公民館や青少年施設の職員, 奉仕活動をしている人,
 電話相談の相談員の人, TVやラジオの人生相談の人,
 (貸)本屋の人, 理容店・美容院の人, 行きつけの喫茶店やスナックのママ・マスター,
 飲み屋のオヤジ, 自動車の整備工場の人,
 その他(),

ているある種の他の大人の方が説得力を持っている可能性もあると考えられる。画一化を押しつけてくる模範的（表面的に）大人達に平常平易させられている青年にとっては、むしろくずれた部分を持つ大人が時にはカッコよく映るのである。

また、反面教師などという言葉があるように、マイナスのモデルに対する否定という形での影響の及ぼし方も検討する必要があると考えるのである。

つまり、われわれは意味ある他者を生活上の装置や道具（例えば、車、TV、ラジオ等）の普及に伴って生じた青年の生活空間や意識空間の拡がりを考えて、従来よりももっと広い範囲で選択しなおす必要があると考えたのである。

そこで本研究では、青年をとりまく他者の内のどのような人達がどのような意味において青年の中に位置づかっているかを捉えることによって、青年における意味ある他者を考えてみようとするものである。

(1) 研究方法

以上のような理由から、われわれは青年に何らかの影響を与える人を探し出すために、青年が生活の中で意識される他の人の存在を出来るだけ拾い上げることを目指した。そこで、青年（とくにここでは、大学生）が日常接触可能な人々を、出来るだけ細かく分類して選択肢を準備した。

また、人々が青年の生活においてどのような意味を持っているかを捉えるために、青年が生活の中で何らかの意味で他者を意識したり、思い浮べたりする場面を、出来るだけ多くの側面から考えてみた。そして、それぞれの場面、あるいは事項において思い浮ぶ人を、その意味の順に3名をあげてもらおうという方法をとった。その結果作成された質問紙は次のようなものである（表1）。

なお、この質問紙はさらに厳密な調査をするための予備的段階での質問紙である。

(2) 調査の対象と調査期日

調査対象：本大学教育学部2年次及び3年次生、男子66名、女子102名の計168名。

調査期日：昭和60年11月上旬

われわれはここで、大学生を調査対象に選んでいるが、本調査は全国規模で幅広い青年層を対象に行う予定であり、本稿の報告はその予備的段階の調査報告である。

(3) 調査結果の集計

われわれの調査では、各場面、あるいは事項について思い浮ぶ人をその順に3名まで記述することを求めたが、本報告においては第1位にあげられた人についてのみ集計している。何故なら、各事項、あるいは場面で真っ先に思いつく人を、その事柄について最も意味を持つ人と見做したからである。

3. 結果と考察

われわれが今回の調査研究で使用した25項目の中で、本稿では6項目を取り上げ、それらを次の3群に分類する。(1)自己の生き方に影響を与える人(1.自分の生き方について参考になる話を聞いてみたい, 4.あんなふうになりたい), (2)自己の地位の維持又は向上に影響を与える人(8.その人を知っていることが誇りだ, 24.その人を知っていることで自分を大きく見せられる), (3)自己の評価又は自信に影響を与える人(5.その人から注意, 忠告されるとこたえる)の3群である。以下それぞれについて考察する。

(1) 自己の生き方に影響を与える人(「生き方への影響」)

1) 誰の生き方が参考になるか

青年期が近い将来自分が負うことになる役割や責任のための準備期であるという通念は、既に最初のところで述べたように、青年がそれ自体として自己充足的、自足的な存在であるらしいというわれわれの推測をもとに言えば、今日その意味合いは若干減ずるはずである。しかしそうした青年期の意味がなくなったわけではなく、彼らはこの時期に自己の将来に関する多様な情報を手に入れることに関心を払うはずである。その場合の「生き方」として具体的には就職や結婚、人生観や社会観・世界観、あるいは人間観に関することなどが一応考えられる。彼ら青年がどういう人との関係の中でそれを考えているかによって、彼らの考える「生き方」や影響の質を読み取ることができると考える。そこで「自分の生き方について参考になる話を聞いてみたい」人は誰かをたずねた(図2)。

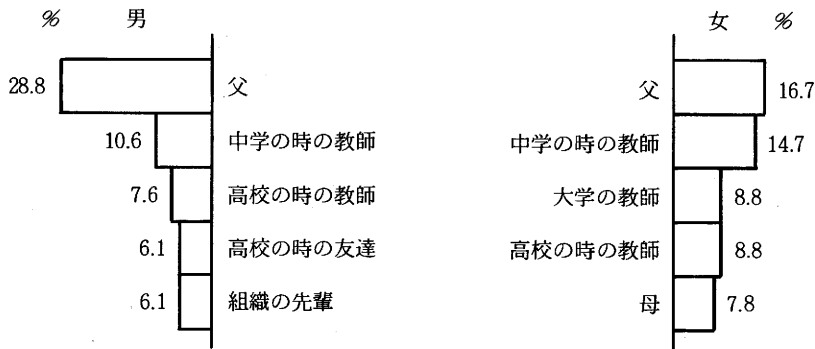


図2 自分の生き方について参考になる話を聞いてみたい。

男子では「父」が最も多く28.8%であった。これは女子でも同じで、比率こそ男子を下まわり16.7%であったがやはり「父」が「生き方」について参考にしたい人として最も多かった。ただし女子の場合、父の他に「母」をあげる者が7.8%いることが注目される。男子の場合「母」は皆無であった。

男子の場合、父の他では「中学の時の教師」(10.6%)、「高校の時の教師」(7.6%)など「教師」が多い。これは女子の場合も同様であるが、ただし女子の場合にはこの他に「大学の教師」が付け加わることに注目したい。

男子の場合この他に「組織の先輩」（6.1％）があげられている。われわれは調査票作成に当って青年に影響を与える人として敢えて「組織の先輩」という選択肢を加えた。これは20歳前後の青年でインフォーマルな組織、特に暴力団などのような組織を想定したものであったが、大学生の場合それはないため、彼らはそれを学内でのクラブ活動などと理解したようであった。

この他に男子では「高校の時の友達」（6.1％）が入っていることも注目される。ただし女子では比率は低く男子と著しい対照を見せている。

以上の結果から次のようなことが推測できる。「生き方」について参考になる話を聞ける人として「父」はまだかなりの影響力を持っているらしいこと、少なくとも青年からはそのように期待されていることである。しかし「生き方」に関わる他者として「父」を選ぶということはどういう意味なのであろうか。「生き方」に関わる話を父親から聞きたいという事実は、彼らの「生き方」というものについての意識の質を規定し、同時に彼らと父親との関係の質及び彼らの父親像を規定していると考えられる。彼らは家庭や父親への依存関係を断ち切れないままそこに安住していること、彼らの父親像がかなりのところたてまえといつか観念的なままであることがまず指摘できよう。つまりそこに見られる素直な父親肯定の態度は、かつての反発、拒否、忌避の対象としての父親、反面教師である限りにおいて「生き方」のモデルとしての意味を持つに過ぎなかった父親のイメージとはかなり異なるイメージで彼らが父親を考えていることを示している。

また「教師」が生き方に関する話を聞きたい人としてあげられていることがどういう意味を持っているのかはこの結果からだけでは分らない。青年の場合、それまでの人生において就学期間の占める割合が最も大きいわけであるから、必然的に「教師」との関わりは大きく、そのためにこれからの生き方について参考になる話を聞きたいという時、直ちに「教師」と答えたのだとも考えられる。またそれ以外に、「教師」があげられているのは、今回の調査対象者が教育学部の学生であるというサンプル特性にもよるかもしれない。つまり近い将来の職業として彼らの殆んどは教職を志望しているため、いわゆる教育現場に入った時に必要な様々の情報をもって「生き方」に関わる情報として理解しているため、比較的容易に話を聞くことのできる以前の教師をあげたとも考えられる。

2) 誰のようになりたいか

われわれが「生き方」への影響を調べるために次に用いたのは、「あんなふうになりたい」と思う人は誰かという項目である。

青年期、ことにほぼ生業を決定すべき時期にある大学生にとって、それとの関係で具体的な目標ともなるべき人物がいることは当然である。われわれが当初予想した結果は、生業決定との関わりから「父」や「教師」がかなり多いのではないかということであった。

その結果が図3である。われわれの予想と違わなかった結果と明らかに違う結果と両方が含まれている。

まず男子では「中学の時の教師」（13.6％）、「高校の時の教師」（9.1％）、「小学校の時の教師」（7.6％）の3つを合わせて30.3％の学生が「教師」を選択している。これは前述したように、ひとつには青年、特に大学生の場合、学校教育や教師への親和性が就学期間の長さや彼らが向学校文化の中で知的達成をした層であることから比較的強いことによると考えられる。もうひとつは、彼ら

が教育学部に在籍している学生であるという理由である。

女子の場合にも、男子と同じく「中学の時の教師」(16.7%)、「高校の時の教師」(12.7%)、「小学校の時の教師」(7.8%)の合計37.2%が「教師」を選択している。注目しなければならないのは、男女ともに、中学校教師、高校教師、小学校教師の順位で選んでいることである。

また女子では「母」(6.9%)をあげている者も少なからずいる。ただし男子が「あんなふうになりたい」としてあげた「父」(10.6%)に比べて比率は低い。

われわれが「あんなふうになりたい」という項目によって予想したのは、生業決定に関しての目標となる人物であった。しかし男子の場合、「あんなふうになりたい」という人物は、必ずしも生業決定に関わりある人物とは限らないのである。図からも明らかのように、彼らは「俳優」(7.6%)や「スポーツ選手」(6.1%)も選択しているのである。これは言うまでもなく、目標として価値を認めている人物の要素に、彼らが金銭、名声、容姿などを含めていることを示している。

なお「組織の先輩」も男子で6.1%、女子で8.8%回答があった。この意味は前にも述べたように彼らが所属している大学内の学生のクラブ組織などを指しており、そこでの先輩は彼らにとってかなり重要な意味を持っていると考えられる。

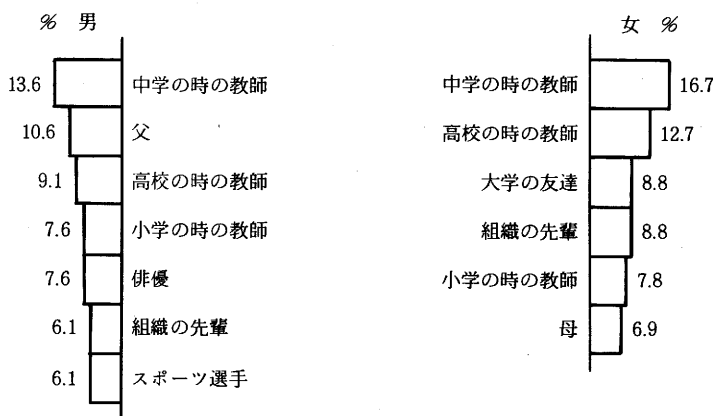


図3 あんなふうになりたい。

(2) 自己の地位の維持又は向上に影響を与える人(「地位への影響」)

われわれが次に注目したのは、青年とその人物との関係が他の人間関係において意味を持つような人物として誰をあげるかということである。一般に「その人を知っているために大きな顔ができる」というようなことがある。そういう人物をわれわれは「自己の地位の維持又は向上に影響を与える人」とした。そこで取り上げた項目は、8.その人を知っていることが誇りだ、24.その人を知っていることで自分を大きく見せられる。の2つである。

1) 誰を知っていることが自慢か

誰を知っていることが自慢かとたずねた結果が図4である。男子では「父」(13.6%)が最も多かった。今回の調査でわれわれが極めて意外であった結果の一つがこの男子青年の父親に対する評価の高さであった。他の諸項目においても父親に対する評価は万遍なく高いのである。自分の父親を

誇れるという感覚は、われわれの年上の世代とは異質の感覚である。それは2)でも更に(3)においても指摘するけれども青年の精神的未熟さの表われであり、家庭を基準としてしか社会や人間を見ていないということなのではないだろうか。しかも男子は女子よりも父親への愛着は強いのである。男子はその他「大学の友達」(61%)、「小・中学校の友達」(3.0%)のように「友達」が無視しがたい比率を示している。特に「大学の友達」というのは学生集団内部での評価や人気の構造と関係があると推測できるがこの結果も意外であった。また「大学の教師」(6.1%)、「中学の時の教師」(4.5%)など「教師」をあげるのも合わせて10.6%いた。

その他男子で意外であったのは、「スポーツ選手」(4.5%)や「歌手」(3.0%)、それと「俳優」(3.0%)が自慢できる人物、他に誇れる存在としてあげられている。これもまた前の(2)の2)で「あんなふうになりたい」人物として彼らがあげたのと同じである。金銭、名声、容姿などを人間関係における優位性を計る基準と見做している学生が少なからずいることを示している。

一方女子の場合を見ると男子と同じなのは「友達」と「教師」が多いことであった。「友達」は合わせて11.7%、「教師」は合わせて12.8%といずれも男子を上回った。男子と異なるのは「知り合いの医者・看護婦」(2.9%)が僅かながらあげられていたことである。

男女ともにあげられているものの中で注目すべきは「恋人」が男子で4.5%、女子で6.9%もあったことである。しかしこれは常のような読み方をすべきであろう。男子も女子も大学内での閉鎖的な人間関係の中では、友人に対して優位性を示す材料の一つは「恋人」の有無であるとも言えるから、「その人を知っていることが誇りだ」という場合の「その人」とは、彼らにとって「恋人」を意味することは十分に考えられるのである。

以上の結果からもわれわれは、たとえサンプルが学生に限られているとは言え、現代青年にとってその人を知っていることが他人に対して誇れるような人物は、われわれが考えるのとはかなり異質であると考えられる。それともうひとつ指摘しておくべきことは、「誰に対して誇れるのか」という基本的で重要な問題である。なぜならば「誰を誇るか」の問題は、「誰に対して誇れるか」の問題と深く関わっているからである。この結果は彼らのふだんの人間関係がどのようなものであるかを暗示している。

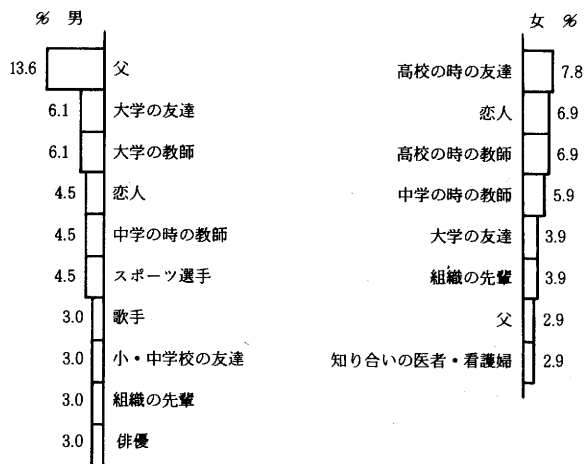


図4 その人を知っていることが誇りだ。

2) 誰を知っていることで大きな顔ができるか

1)との関連でわれわれが次にたずねたのは、青年がその人を知っていることで他人に対して大きな顔ができるのは誰かという質問である。この問もまた青年がどういう人に対して大きな顔をするかという問題と誰を知っているかの関連の問題である。その結果が図5である。

男子は「父」(7.6%)が最も多い。父をもって誰に対して大きな顔をしようとするのかは明らかではない。既に述べたように「父」を誇るという感覚はわれわれとは異質であり、素直な父親肯定は、彼らの家族や親への強い依存傾向と、彼らの社会認識の弱さ以外の何物でもないと思われる。

次に多いのは「恋人」(6.1%)である。「恋人」の持つ意味は基本的には1)の場合と同じであると考えられる。「大学の教師」(6.1%)をあげているのは、彼らの人間関係が閉ざされていることの一つの証左であると考ええる。「大学の友達」(4.5%)と「小・中学校の時の友達」(3.0%)を合わせた「友達」の比率は7.5%である。同じ友達でも意味は異なるかとも思われるが、これは彼らの交友関係の実態を詳細に見ることによって明らかとなる。

その他では「俳優」(4.5%)、「歌手」(3.0%)、「スポーツ選手」(3.0%)が合わせて10.5%あげられていたのは、前の(2)の2)と(3)の1)での意味と同じ文脈に属すると考えられる。ただし「俳優」や「歌手」や「スポーツ選手」を知っていることによって「大きな顔」ができるとするのは、彼らが重視している集団や交友関係の質がどのようなものであるかを示唆している。彼らの集団や交友関係自体がそういう人物を知っていることに重きを置き、そのことが青年の集団内での優位性の獲得に関わっているのである。

女子の場合は男子とかなり異なる。「恋人」(8.8%)が最も多い。「大学の友達」(3.9%)、「高校の時の友達」(2.9%)、「小・中学校の時の友達」(2.9%)を合わせた「友達」は9.7%に達する。その他に「同じ趣味・遊びの仲間」(2.0%)があげられていることも注目してよい。「教師」は「高校の時の教師」(2.9%)があげられるにすぎない。「組織の先輩」(2.9%)や「知り合いの医者や看護婦」(2.0%)があげられているのも前の1)と同じであり、また男子と異なる点である。

以上のことから青年の評価や地位に関わる他者は、彼らの狭く、即物的で没社会的な人間関係を反映したものとなっていることが明らかである。この傾向は特に男子に著しい。

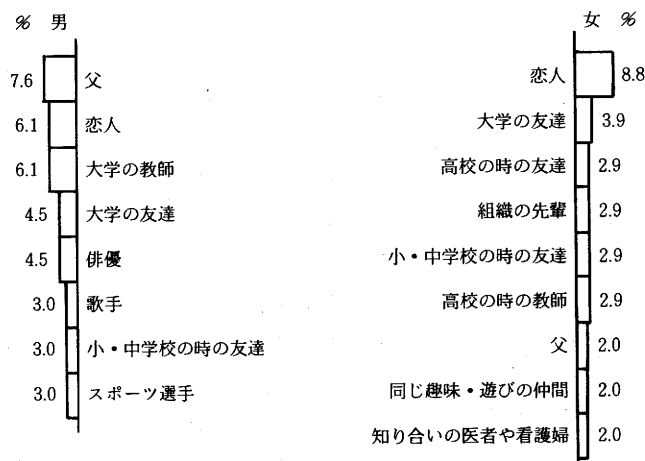


図5 その人を知っていることで自分を大きく見せられる。

(3) 自己の評価, または自信に影響を与える人 (自信への影響)

青年期は自分自身に関心が向き, 自己を他者との関係の中で評価し自己についての認識を形成する時期である。この時, 青年は他者（それもとくに, 青年自身が何らかの意味で重要視している他者）からの評価を中心にして, 自分自身を評価し自己についての意識を作り上げていくのである。このような時期にある青年は, ある人から注意されたり, 忠告されたりすると, それが自分への評価の低下のように受け止め, 自信を失っていくということが考えられる。そこで問題になる「ある人」とはどのような人かを見る。

1) 誰の注意, 忠告がこたえるか

誰の注意, 忠告がこたえるかを捉えるために「その人からの注意, 忠告がこたえる」のはどのような人かをたずねた。その結果が図6である。

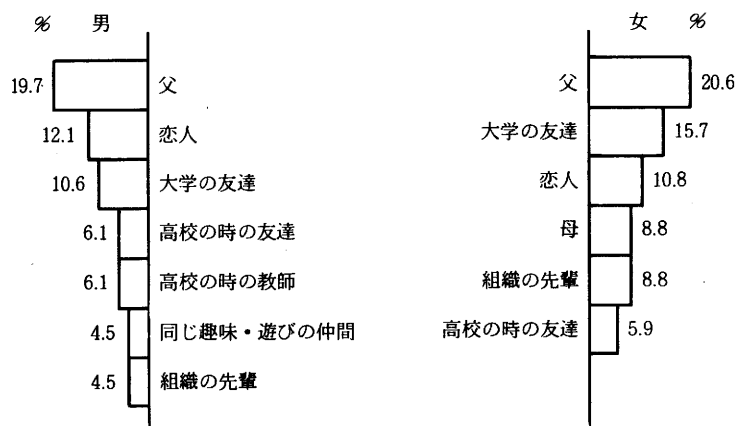


図6 その人から注意・忠告されるとこたえる。

大学生期の青年が, その注意や忠告がこたえる人として, 最も多くあげられたのは「父」(男子19.7%, 女子20.6%)である。次いで「恋人」(12.1%), 「大学の友達」(10.6%)があげられ, 女子では男子の2位と3位が逆転して, 「大学の友達」(15.7%), 「恋人」(10.8%)の順である。「高校の時の友達」は男子の6.1%, 女子の5.9%があげている。「高校の時の教師」(6.1%), 「同じ趣味・遊びの仲間」(4.5%)は男子にのみ見られており, 「母」(8.8%)は女子のみに見られているのは注目される性差であるといえよう。

また, 「組織の先輩」は男子で4.5%, 女子では8.8%のものがあげているけれども, この「組織の先輩」は前述のように, われわれが意図したインフォーマルな集団における先輩としてではなく, 大学生が日頃所属している集団であるところのサークルの先輩を想定してあげたようであった。

この結果を性差の点からみると, 「母」からの注意・忠告は男子にとっては余りこたえるものではないのに対し, 女子においては若干意味を持っている。また, 高校の「教師」の注意, 忠告は男子には幾分かこたえるものが見られるが, 女子ではほとんどない。こうしてみると, 女子の場合, 父母を除く大人の注意, 忠告は余り意味を持たず, むしろ大学のサークルの先輩(組織の先輩)をはじめとする友達や恋人のそれが意味を持っている(大学の友達, 恋人, 組織の先輩, 高校の時の友

達がそれぞれ15.7%, 10.8%, 8.8%, 5.9%で計41.2%)。すなわち、女子では両親以外は高校や大学というフォーマルな集団での交友関係の中から選択されているのに対し、男子にとっては、「教師」のような指導者的立場の人や「同じ趣味・遊び仲間」のようなインフォーマルな形の友人関係の中から選択されている。そしてさらに女子は「父」と「母」で29.4%, 男子では「父」19.7%であることを考慮すると、女子は比較的親密な、甘えられる関係の中での注意、忠告がこたえているように思える。

また、男女共にその注意、忠告がこたえる人として「父」が最も多く選ばれていることは、(1)でもすでに触れているけれども一体何を意味するのであろうか。大学生になっても相変わらず家庭の中の価値観を基準にして行動しているということであると同時に、タテマエとしての「父親像」に反発する迄に至っていない精神的未熟性とも言える実態を示しているとも考えられる。しかし、それ以上に、現代社会における大人と青年との関係の問題があるように思えてならない。つまり、青年が青年のまゝでいることに左程問題のない現代では、社会人としてあるいは大人としてのモデルは余り必要ではなくなって、大人は父親だけで十分となり、その父親からの注意、忠告ゆえにそれがこたえるのだということが考えられるのである。この点については更に検討してみたいと考えている。

2) 誰の評価が気になるか

自分自身に関心を集めている青年にとっては、他の人が自分をどう評価しているか、どう思っているかはひどく気になることである。それが自己概念の形成に中心的役割を果たしているのである。そこで、青年がどのような人の自分に対する評価を気にしているかを知るために「その人からどう思われているか気になる」のは誰かをたずねた。その結果が図7である。

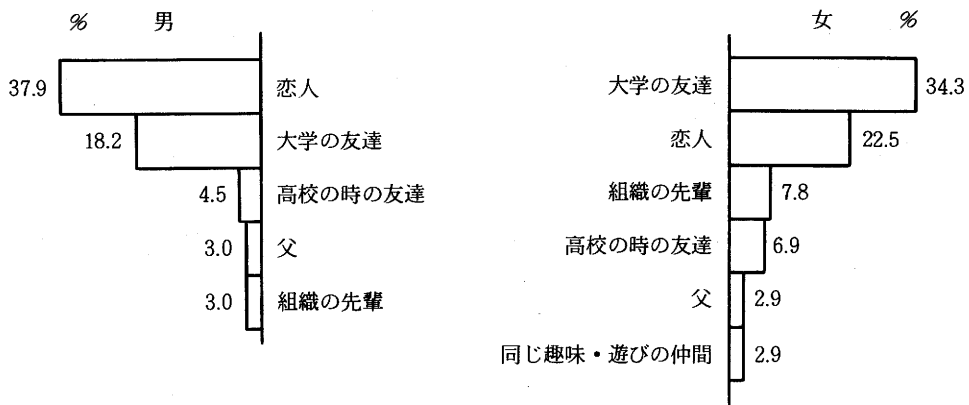


図7 その人からどう思われているか気になる。

図7から全体として大学生がその評価を気にしているのは「友達」であることがわかる。友達のうちでも「大学の友達」が多くなっているのは、被験者が大学生であったことと関係がある。友達関係は今現在自分が置かれている状況で最も接触の頻度の多い中で形成されていくものようである。したがって、大学生であれば「大学の友達」が友人関係の中心になっていく。

ところで、「その人からどう思われているか気になる」人として男子が最も多く選んだのは「恋人」の37.9%で、2位の「大学の友達」（18.2%）のほとんど倍である。他方、女子で一番多かったのは「大学の友達」で34.3%、次ぎが「恋人」の22.5%である。この結果を見る限りでは男子の方に「恋人」の評価を気にする者が多い。評価を気にするということは、さらに進めば思惑を気にするということにもなる。女子で「恋人」の評価を気にする者は22.5%であるのと比べると、恋人関係において女子の方が醒めているということが考えられるが、同時に、恋人関係における「選ぶ側」と「選ばれる側」とが従来、考えられていた関係の逆の関係になって来ていることを示しているのではないかと推察出来る。したがって、そこから描ける恋人関係は、女子が「選ぶ側に立ち、その関係において醒めて」おり、男子は「選ばれる側にあって、恋人の評価や思惑を気にして」いるというものである。

女子にあっては、「恋人」よりも今現在の友人である「大学の友達」からどう思われているかが気になるようである。女子学生にとってはそれだけ「大学の友達」が重要な意味を持っていることを示しているのであろう。

ところで、ここでもまた「父」があげられているのが注目される。「母」はあげられていない。「その人からどう思われているか気になる人」として「父」を第1にあげたのは男子3.0%、女子2.9%で多くはないが、あがって来ていることに注目したいのである。

「評価が気になる」ということには、一つには「よく思われたい」という欲求があって、「どのように評価されているか気になる」ということであり、いま一つはその人の考えていることが全くわからず、「一体自分のことをどう見ているのだろうか」という意味で「気になる」ということであると考えられる。

そこで、「母」の評価が気になる者がいないのに、「父」の評価が気になる者がいるということは、一つは「父」から「よく評価されたい」と思っているが、父が本当に自分を「期待通り評価してくれているかどうか気になる、悪く評価されたくない」という者がいることが考えられるが、いま一つは、母は非常に親密な関係であるために「どのように思われているか」がよくわかっているのに、父の方は距離があり、余り話もしないので「一体どのように思っているのか、さっぱりわからない」が故にどう思っているか気になるということが考えられる。前者の場合は大学生にとって父親がかなり重要な意味を持っていると言えるが、後者である場合は父親との心理的距離が大きということになる。しかしこの結論は、他の事項における父親の意味の検討を待ちたいと考えている。

注

- 1) 菊池龍三郎・安達喜美子、「現代青年における『成人感』の発生とその社会的規定要因(1)——問題発見的考察——」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』, 34 (1985), pp. 111-129.
- 2) 菊池龍三郎・安達喜美子、「現代青年における『成人感』の発生とその社会的規定要因(2)——『成人感』の発生の心理的・社会的機制——」『茨城大学教育学部紀要（教育学科）』, 35 (1986), pp. 189-204.
- 3) 菊池龍三郎・安達喜美子、「青年教育の課題としての『自立』の意味について(1)——『大人になりたくない』」『茨城大学教育学部紀要（教育学科）』, 36 (1987), pp. 1-10.

- い』青年の意味するもの — 』『茨城大学教育学部教育研究所紀要』17 (1985), pp. 41 - 48.
- 4) 岩佐信道, 『児童の自己概念とSignificant Others の態度との関係についての研究』(道徳科学研究所研究部, 1976),
 - 5) 木舟恭子, 『青年期における他者の意味についての研究 —Significant Others について— 』(茨城大学教育学部教育心理学科卒業論文, 1978), 未発表.
 - 6) Reitzes, D. & Mutran, E., "Significant Others and Self Conceptions: Factors influencing Educational Expectations and Academic Performance.", *Sociology of Education*, 53, (1980), pp. 21 - 32.